

癒しの民俗宗教としての台湾キリスト教—真耶穌教会を事例として—

藤野 陽平

はじめに これまでの台湾のキリスト教研究とその問題点

第1節 歴史

第2節 礼拝・諸儀礼

第3節 奇跡体験 —癒しの言説—

おわりに

はじめに これまでの台湾のキリスト教研究とその問題点

本稿は研究ノートとして真耶穌教会の歴史、教義、礼拝・諸儀礼、そして本教会を最も特徴付けていると考えられる癒しの言説を順に紹介することを目的とする。現在台湾では様々なキリスト教会が活動している。信者数も2000年末現在で天主教が178,325名、基督教が390,019名で合計が568,344名と道教の806,872名に続き、仏教の196,704名を上回り、寺廟教堂数も道教が7,415箇所、仏教が1,704箇所に対して天主教が707箇所、基督教が2,254箇所を合わせると2,961箇所となりキリスト教は道教について第二位の勢力を誇っている²。当然、自らを道教や仏教の信者とみなさなくても寺廟で拝拝³する人も多く、この統計を鵜呑みにはできないし、単に信者数が多いから研究対象にすべきという訳でもない。しかし、キリスト教は現代の台湾社会において一定の影響を持っており、研究対象足り得ないという理由は見出し難い。

しかし、管見では本邦における台湾のキリスト教の研究はキリスト教台湾宣教史一般の潘堅郷⁴・加藤実⁵、鄭仰恩⁶の研究、戦時中のキリスト教を扱った森山昭郎⁷・山本禮子⁸の研究、原住民との関わりを述べた坂本進⁹の研究等がわずかにあるのみで、未発達分野である。また台湾の研究者が扱ったキリスト教研究もそれほど多くはない。分類するならば台湾の宗教を概説したものの中でふれられているもの¹⁰、キリスト教台湾宣教史に関するもの¹¹、特定教会に関するもの¹²、近代医療とキリスト教の関係を扱うもの¹³、宣教師に関するもの¹⁴、地域研究の中でキリスト教に注目するもの¹⁵などがある。

しかし、台湾研究としてキリスト教の研究という視点に立脚すれば、台湾で設立・発展した教会を扱うことが最も有効であろう。この視点からは史文森による独立教会の研究¹⁶があるが、独立教会をいくくりにし教義の単純比較研究であり、独立教会を実体的な物としてとらえているのではないかという疑問が残る。以上の問題意識から本稿では真耶穌教会を紹介する。本教会は中国大陆で設立され、国共内戦後台湾を中心に発展したために本稿の問題意識に適切な事例である。また本教会は近代になって東アジアで信仰を活性化しているペンテコステ運動の先駆的な事例でもあり、将来的には東アジアのキリスト教研究¹⁷との比較研究の可能性もあるし、台湾人がキリスト教を構築する様をみることで民俗知としての宗教観を逆照射することもできる。しかし、本教会を中心に論じている研究は張芸鴻¹⁸と楊森富¹⁹の研究のみで、台湾研究の世界で広く知られているわけではない。

なお、現在「民俗」の概念について様々な議論が起きているが²⁰、本稿で言う民俗とは重層的

な共同体の持つ社会的コンテクストの中で生活者が教義やそれまでの行動様式を意識的・無意識的に選びとることで構築し続ける生活様式とする。本稿で言うところの民俗宗教とは²¹宮家準によれば「生活上の必要に応じて摂取する際の論理とでもいえる受けとめ手の宗教²²」であり、池上良正によれば「宗教を経典的・制度的な教団が説く教義や、宗教的達人・思想家たちの著作類に記された理念や思想のレベルでのみ問題にするのではなく、これらの理念や儀礼形態が現実の生活者の場においていかに語られ、いかに実践されているかという現実態に着目する視座である²³」などにみられるように宗教に接する者の実践のあり方と考える。ゆえにキリスト教を含めた教団宗教であっても民俗宗教と考へ、いわゆる民間信仰と同義には用いない。

第1節 歴史

1. 台湾前史

20世紀初めにアメリカから発生したペンテコステ運動影響下、1910年上海のペンテコステ派上海使徒信心会にて張霊生の長男、張溥泉が聖霊を受け、張霊生も聖霊を受け北京で1917年に耶穌真教会としてスタートした。当初は耶穌教会や更正耶穌教会、耶穌新教会、耶穌真教会など様々な名称を用いていたが、1917年天津で行われる集会のための白旗に「耶穌真教会」を王被得が「真耶穌教会」と書き損じてしまった。それを見た魏保羅は「これは主の聖意である²⁴」として、このときから「真耶穌教会」という名称に確定した。

2. 台湾宣教と組織史

1926年3月3日台湾に真耶穌教会が伝えられた。8日後の3月11日には十五張犁で台湾での最初の洗礼を62人に施行し、線西教会（現伸港教会）を設立、16日に牛挑湾で27人に洗礼をし、牛挑湾教会（現在は朴子教会と合併）を設立、4月3日には鹿寮において11人に洗礼をし、清水教会を設立した。つまり、40日の伝道で3箇所教会と3家族100人の信者を獲得したということである。その後も順調に宣教したのだが戦争の波に巻き込まれて、総督府の圧力で1941年2月台湾支部を「日本真耶穌教会本部」と改称²⁵し、宣教も制限され、この時期はほとんど成長していない。戦後1947年に起きた二二八事件の後の1948年3月29日には「台湾省支会」と改称している。この頃の1949年から大陸との連絡

年代	信者数	教会数
1945年	5057	36
1950年	8475	49
1955年	15068	89
1960年	19657	110
1965年	25174	135
1970年	29387	156
1975年	33491	174
1980年	36622	191
1985年	39441	211
1990年	42513	215
1995年	46384	224

表1 真耶穌教会信者教会数推移 (『真耶穌教会台湾伝教七十周年記念刊』真耶穌教会台湾總會偏審委員会 1996年をもとに作成した)

が途絶え始め、「台湾省支会」は独立した団体として機能していく。その後は順調に宣教して1990年には215箇所の教会を抱えるまでに成長している。特に50年代から70年代は約10年で50箇所の教会を新設しており、単純計算で年に5箇所というペースでの宣教がなされていった。1995年の状況では教会数224箇所、信者数約46,384名、伝道者112名である。台湾の基督教信者が390,019名で、登録されている教会が55団体である²⁶ので全体の10分の1以上という信者を獲得し、戦前から宣教してきた天主教(教会数774、会員数301,352名)や台湾基督長老教会(教会数1,218、会員数217,280名)、中国・台湾にルーツを持つ召会(教会数702、会員数98,108名)、独立教会(教会数598、会員数87,328名)に続く勢力となっている²⁷。

第2節 礼拝・諸儀礼

1. 礼拝

本節では真耶穌教会の礼拝の模様を紹介したい。同時に教義についても重要視されている五大教義(洗礼、洗足、聖餐、安息日、洗礼)等を中心に取り上げる。一般の教会は日曜日を安息日としているが、それはローマ帝国によって538年3月7日に決められた物であって、土曜日に行うのが正しいとされ、安息日礼拝は土曜日に行われる。また、それ以外の日の夜に各種の集会²⁸を行っている教会が多いが、基本的な礼拝の構成は定まっている。

礼拝が始まる前に参加者が集り、個別に祈る。礼拝開始5分前頃に数曲讃美歌を歌う。礼拝が開始するとまず黙禱をし、讃美歌を歌う。讃美歌は1970年8月に修訂されたもので真耶穌教会では共通してこの讃美歌を利用している。また、他言語の讃美歌も同じ番号のものは同じ曲になっており、たとえ国語と呼ばれる北京語を喋れない人であっても、その人の理解できる言語で歌って構わない。続いて祈禱である。跪き、最初に「ホン・ジュイエス・シエンミン・ダオガオ 奉主耶穌聖名禱告(主イエスキリストの御名によって祈ります)」と言い、「ハリルヤ 哈利路亞」「ザンメイ・ジュイエス 贊美主耶穌(主イエスを賛美します)」と繰り返す。そのうちに手が震えだし、舌がもつれて霊言を語り出す。真耶穌教会では聖霊を受けた者には霊言が伴うと考えられているが、霊言とはペンテコステ教会の「異言」に相当するものであり、霊によって自然と口からでる言葉である。「異言」もしくは「方言」という訳語は「未だ聖霊を受けざる者、従って異言を語った事のない者の翻訳」であり、「元来原語グロサ(Glossa)は舌の語の複数形で、即ち人が聖霊に充たされる時に、霊の力に舌を激動され、自然に迸り出づる一種の霊の言である²⁹」ので、「霊言」の訳語を利用しているという。祈禱の最後にはベルが鳴らされ、終了する。

説教は台湾語を母語とする人が多い地域の教会では説教者が台湾語で話し、通訳者が国語に通訳する。これは会衆がどの言語を主に利用するかによって翻訳する言語は異なり、日本の真イエス教会では中国語と日本語、原住民の地域では国語とその民族の言葉が使用される。内容は聖書主義に則り、聖書の注釈が中心となる。説教は礼拝の中心をなしており、1時間半ほどの礼拝の中で説教に1時間近くが費やされる。ちなみに説教以外でも聖書の記述を忠実に再現することを目指し、真耶穌教会以外の教会で行われていることでも聖書に一致しないと判断されたものは行

われない。例えば聖書にイエスの誕生日が12月25日という記述がないことからクリスマスの行事は行われない。真耶穌教会にて用いられる聖書は『聖經 和合本(神版)』で、その特徴は God の訳語に「神」を用いている事である。それ以外の訳では「上帝」を用いているのだが、それでは道教の最高神「玉皇上帝」を思わせ、誤解を生む可能性があるということである。

説教後はもう一度讃美歌を歌い、最後の祈祷となるが、その前に助祷卡³⁰を読みあげ、祈りが必要なことが読みあげられる。そして、特に問題を抱えている人は前に出て跪き祈祷を行う。彼等に対して伝道者、長老、執事³¹は按手して祈りを助ける。最後にベルが鳴らされ、讃美歌を歌う。この後に一同は起立し、左右で向き合い礼をして礼拝が終了する。

2. 佈道靈恩大会

月曜日から日曜日までの一週間にわたって行われ、月曜日から木曜日までの佈道会、金曜日から日曜日までの靈恩会を合わせて佈道靈恩大会と呼び半年に一度行われ非常に重要視されている。佈道会では未信者に向けた基本的な聖書の解説を中心とし、靈恩会では一般の信者に向けた内容の説教を中心とした礼拝が行われる。また洗礼、洗足、聖餐が行われる。その時期は各教会ごとに決定する。なお以下の記述は筆者が参加した2002年10月の台南教会における佈道靈恩大会の様相を中心としている。

(1) 洗礼

一般の教会のように真耶穌教会でも洗礼は水に体を浸す事で罪を清めると共に、この儀礼を通じて信者として認められることとなるために重要視されている。しかし、その方法は以下の条件を必要とし、それ以外の方法による洗礼を認めない。その条件とは聖霊によって使わされたものによって、イエス・キリストの御名によって、流れる水の中で、顔を下にして全身を水に浸すという事である。なお「イエス・キリストの御名」とは「父・子・聖霊の御名」ではないということである。これは三位一体を認めないというわけではないが、一般にヤーヴェとされている父なる神の名や聖霊もその名はイエスであるという。また「流れる水の中で、顔を下にして全身を水に浸す」とは頭だけ浸す方法(滴礼)や全身を水に浸しても水槽の中で行うやり方ではいけないということである。

筆者が参加した洗礼は土曜日の昼に台南市西南部の海岸にて行われた。この日の洗礼は台南地区4教会³²が合同で行い20人が洗礼をうけた。会衆は海のほうを向いて集り、讃美歌294番を歌い、式を開始した。その後祈祷が行われ、洗礼に入る。受洗者は二人の人に付き添われ、海の中に入って行く。全身を浸すのに浅すぎず深すぎないところで、陸に向かい跪き伝道者の「主イエスの御名によって洗礼を授ける」という言葉と同時に顔を下にして全身を水に浸す。同時に会衆は讃美歌を歌い続ける。30分程度で20人の洗礼が終わり、最後に祈祷をもって式は終了した。

(2) 洗脚礼

ヨハネによる福音書13章1節から20節のイエスが弟子たちの足を洗ったという記述を起源と

して、信者が足を洗いあう儀礼で、謙遜と奉仕、愛と赦しの教訓があるという。

日曜日の午前中に聖餐礼の直前に行われた。前日に洗礼を受けた2名が礼拝堂最前列に着席し、執事がその2名の脚を洗った。

(3) 聖餐礼

洗礼同様一般の教会でも行われるパンと葡萄酒をキリストの肉と血として食しキリストの死と罪の許しを記念する儀礼であるが、やはり条件があり、「聖霊を受けた者が執行」、「酵なしパン」、「葡萄汁」、「パンは一つ」、「手で裂く」ということである。酵なしパンと葡萄汁とは罪のシンボルである酵とアルコールが入ってはいけないという事で、パンは一つのパンから手によって全員分に裂かれなくてはならないという。

儀礼はまずパンの祝謝から行われる、この時にパンが捧げられるので、以後聖なるパンとなる。伝道者・長老・執事の手によって一つのパンから約500名の参加者に行き渡るように細かく裂かれる。裂き終わったパンはトレーにのせられ、会衆に配られる。パンを全員が食べ終わると、次は葡萄汁である。式自体はパンと同様の手順で進められる。つまり、祝謝をし、伝道者・長老・執事によって杯に注がれ、配られる。パンと葡萄汁は当日の早朝に教会の炊事場で作られる。酵なしのパンとアルコールの入っていない葡萄汁で行うが、より厳格にパンは水と小麦粉のみ、葡萄汁は葡萄を搾ったものを作っていた。

第3節 奇跡体験 一癒しの言説一

真耶穌教会の信者と話をしていると教会に通う事で様々な奇跡が起きたとよく聞かれる。教会に通い始めたばかりの人や未信者には権能を示すために特に積極的に語られる。以下は彼らが奇跡として語った物を報告する。以下の報告は彼らの臨床リアリティ (clinical reality)³³の要素の重要な部分をしめている。

1, 台南地区 男性

息子が1歳から白血病でした。医者にはすぐに見離されました。子供が6歳のときに妻の姉の紹介で妻が教会に通い出しました。当初、私は教会に通うことに反対しました。当時、息子は夏でもコートを着なくてはならず、また、解熱剤を飲ませてはならないなどの条件があったので、そのことが解っているかかりつけの医者には通えませんでした。

ある日、家を出ようとしたときに息子が風邪をひいていたので、妻に「いつもの医者に連れて行くように」と言っておいたのに、医者に行かないで、教会に行っていました。教会に行っていたので遅く帰ってきた妻に「こんなに遅くなってどうしたのか」と尋ねたところ、妻は「教会に行っていた」と言いました。その時からちょうど子供の熱は下がり出しました。それ以来彼は健康に暮らしています。今は42歳でB県に住んでいます。

その後の佈道霊恩大会で私以外の妻子家族全員が洗礼を受けました。自分は長男でまだ母

が生きていて、葬式の拝拝をしなくてはいけないので洗礼を受けられませんでした。妻にも子供だけ受けさせるように言っておいたのです。しかし、教会の会議で子供だけでは受けさせられないということになり、妻は私に内緒でこっそり洗礼を受けたのです。川で洗礼をしているときに私は子供だけが受けると思っていたら、妻も受けていたのでびっくりしました。しかし、それ以来私も教会に行き集会に参加するようになり、神は公平だから、私にもこのような大切な真理を授けてくれると思ったのです。そして、毎日その真理を授けられるように祈ったのです。

民国 57 (西暦 1968) 年 2 月 2 日の集会のときに聖霊を受けました。それ以来両親から遺産を貰わなくても構わないと思って、弟に拝拝を任せて、5 月 5 日に洗礼を受けました。それまでは廟の規定通りに生きてきました、線香、金紙、祭り等、今は一切やっていません。この教会の神は本当の神。拝拝の神は人が作った神です。

この言説は長男の白血病を通じて家族が信者になった過程である。幼い息子が 5 年間白血病に悩まされたという経験は両親にとっていかにほどの苦痛であったかは想像を絶するものであろう。これは風邪を引いていた息子を病院に連れて行かず夫に「こんなに遅くなってどうした」と言われるほど遅くまで教会に連れて行ったことから伺われる。この経験を通じて妻は入信するが、彼自身は長男であり、親族の代表として祖先祭祀を行う義務があり入信には二の足を踏んだ。しかし、最終的には長男の権利を投げ打って入信する事となる。

2, 台南地区 女性

流産をしてから 6 年間後遺症に悩まされました。重いものは持てず、気分も悪く、歩くのもままならないので、外出は必ず車で行わなくてはなりません。その間は他の教会に行っていたのですが、一向によくなりません。そのような時に友人から「真耶穌教会には本物の神がいる」と教えられ、一回だけ行ってみることにしました。しかし、その祈りの方法が気持悪く、一回だけでやめてしまいました。しかし、4 ヶ月後、もう一度行って「もし本当にここに神様がいたら「平安」を与えてください」と祈りました。それ以来、心が安らかになり、教会に通っているうちに不思議と病気も治ってしまったのです。

この言説に特徴的なのは通っても慢性病が良くならない他の教会から転籍している事とペンテコステ派教会の特徴である聖霊による霊言を利用した祈りへの不快感である。台湾の民俗宗教は現世利益的な特徴がみられるという事はしばしば指摘されている事である³⁴。世界宗教・来世志向と言われるキリスト教にも現世利益的な部分は当然含まれている。そうなれば同じキリスト教であっても病いが癒されない教会から癒される教会へと移動する事は考えられるし、もっともな事である。しかし、それまで霊言を使った祈りを行わない主流派基督教会の信者であった彼女にとっては霊言の祈りへの違和感はそれ以外の人と比べても相当な物であったはずである。実際に彼女は最初に訪れたときにすぐ通うのを辞めている。それでも病いの後遺症の苦しみを救って

くれるかもしれない真耶穌教会にもう一度通い始め実際に癒されることとなった。つまりそれまでの基督教だけでは満たされない後遺症への不安が真耶穌教会に向かわせたという過程を見出す事ができる。

3, 台東地区 男性

退職前は鉄道局の運転手でした。運転手の仕事は緊張から来るストレスで胃が悪くなりました。同僚の運転手にも胃が悪いものが多く、10人に8人は胃に病気を持っていました。中には運転中に吐血してしまった同僚もいたのです。そして私は空腹でも満腹でも胃が痛いという状態でしたので、常に胃薬を持ち歩いていました。しかし運転中に食事の時間になると大変困りました。目的地に着くまで食べないと空腹で痛みが来るので、運転中に食事を取ることがありました。そのような時は上り坂で速度が遅いときに取るようにしていました。下りは速度が上り危険なのです。

この問題を抱えていたときに真耶穌教会に通い始めました。佈道靈恩大会のために断食の祈りがありました。空腹になると痛みが来るので非常に困っていました。しかし、この祈りのとき以来胃が治ったのです。自分のためではなく、教会のために祈ったのが良かったのでしょう。断食には力があるのです。断食すると神の力がはっきりと見えます。

2の女性のように真耶穌教会を含むキリスト教の信仰のある部分は現世利益的な要素があると指摘したのだが、単純にそうとも言い切れないのがこの言説である。鉄道の運転手という激務で胃痛を患った語り手に真耶穌教会に通い靈恩会の断食に参加することによって避けねばならない空腹という危機が訪れるのである。ただ病いが癒されるだけでよいのなら彼は胃痛を理由に断食を断る事もできたはずである。池上良正によれば現世利益は露骨なエゴイズムが暴走することの歯止めになるとした上で、現世利益をめぐる人々の会話や論争の具体相に注目すべきであるとしている³⁵。確かにこの例以外の癒しの言説を見ても病いが癒されることが望まれただけであって快樂主義や刹那主義、自己中心主義に陥るといふ事はない。むしろ研究者に現世利益的と写ろすが、聖書に根拠を求められれば癒しの実践は強化されるのであろう。癒しには当然身体だけの問題ではないので、全体論的に考えるべきであり、精神的な部分を大いに孕んでいる。本教会における癒しの言説も本事例に見られるように、来世主義とまでいえないにしても反現世利益的な面をも含んでおり、単純に現世利益一辺倒とはいえない部分を含んでいると考えるべきであろう。

4, 台東地区 男性

母は以前芋の農家で苦しい生活をしていました。芋は6棟植えていました。ある日の夕方天気が悪くなりそうな時、母と父は畑で働いていました。その頃雷が鳴っていて、すぐに雨が降りだしそうでした。牛は歩くのが遅いので母は父に牛を引いて先に帰らせ、自分は草取りを終えてから帰ることにしました。父が畑を100mほど離れた時に、母のいる畑に雷が落ちました。その時母はおもわず「ハレルヤ」と叫んだのです。その時母は30cmほど飛び上

がり、地面に降りたとき何ともなく家に帰りました。次の日畑に戻ると6棟の芋が全て燃えていました。しかし母は雷に打たれず、「平安」のままでした。雷は高いところに落ちますが、母にはなく芋に落ちました。信仰があればイエスが守るのでしょう。

弟は妊娠6ヶ月で生まれてしまいました。医者は助からないといいました。六日間乳を飲まないし、生まれたときに泣くこともありません。乳を飲まないで砂糖水を飲ませていましたが、吐き出してしまったり、下痢をしてしまったりで、すぐに出してしまいます。息も弱かったのです。そしてついに母親も疲れから精神病になってしまいました。そこで教会中で彼のために祈りました。しかし、あまりよくならなかったため、母は集会で信者たちと一緒にイエスに「息子が助かるならば助けてほしい、しかし、助からないならば天国に入れて下さい」と祈ったのです。その時急に弟は泣き出しました。それまでは小さい息でかすれるような声で泣いていたのですが、このときから大声で泣くようになりました。母は生きる見込みがあると感じ乳を与えたところ、飲み出しました。その後2.3回祈ったところ顔色もよくなり、食事もできるようになり、イエスは間違いなく助けてくれたのだと確信しました。その弟は今45歳で1男、3女に恵まれ元気で「平安」が守られています。その後母の精神病も祈りで癒されました。だから母は「あなたはイエスに助けられたのだから、イエスに恩返しなくてはならない」といつも弟に言い続けています。

末の弟が子供の頃、飼っていたひよこが死んでしまいました。その頃、肉は高級品でたとえひよこでも貴重で一家にとっては重大なことでした。そのころ弟はイエスの名によって祈るならば死者も生き返ると聖書に書いてあるのを教えてもらったばかりで、兄弟全員を集めてひよこのために祈ったところ、ひよこは生き返りました。

人間にとって「平安」が一番必要なものです。「平安」は神から来るのです。真の信仰が「平安」の素です。一般の人が欲しがるのは人の手で作ったものです。真の「平安」は体験する必要があるものです。どの神も「平安」といいますが真の「平安」は真の神から来るのです。人を殺すような宗教の「平安」はおかしいでしょう。イザヤ書にはイエスのことを預言して「「平安」の王」と言っています。またイエスが伝道しているときに多くの病人を治しました。彼らはイエスを信じたらずぐに治ってしまいました。私の一家の証はイエスによって「平安」になったということです。一家にはもともと「平安」ではありませんでしたが、信じてから「平安」になりました。拝拝していた頃に比べて、イエスを信じるようになってから生活が良くなりました。というのは健康ならば商売ができるのです。不健康では薬や医者にかかります。真耶穌教会に来てからそれまでの問題は解決し、病気が治り、生活が良くなりました。

語り手の家族に対して何度となく訪れる危機を真耶穌教会への信仰によって乗り越えてきたという証言である。芋農家であった母親が落雷から身を守ったことや未熟児であった弟が母親と教会の祈りによって生命力を得ていく過程、末の弟が飼っていたひよこが祈りによって生き返ったことが述べられる。その結果、真耶穌教会への信仰によって「平安」となったと結論付けている。

筆者はこれまで台湾にとっての民俗的健康観としての「平安」の概念を探り、「平安」という概念が健康を中心としながらもより広い意味が与えられ様々な世界観の影響を受けながら個人の経験の中でつくりあげられていく様を論じてきた³⁶。この言説も以上の定義の枠内に当てはまるものであるが、実際に「平安」という概念が真耶穌教会に通う事で真耶穌教会独特の「平安」として再構築される様子が窺い知れるという意味で興味深い。真耶穌教会の信者にとって商売をする（「発財」と「平安」とは異なる概念であるという答えが一般的であるが、彼は「平安」とお金儲けが近い意味であるという。しかし、それでも単純に金儲けに走るということではなく、神への信仰から健康が取り戻され、つましく努力することができるようになり、その結果としての日々平穏に暮らすことができるようになったという「平安」の一部としての金儲けであるという点は指摘しておくべきである。この家族にとっての「平安」とは単に健康や金銭といった個別的な問題に留まらない広い概念であり、生活上の安寧が得られている状況であると考えられるであろう。本稿で取り上げた彼以外の事例は病気が癒される事を中心とした語りであるが、生物医学的「治療」ではない民俗宗教のもつ「癒し」には身体的状態以外にも精神的状態も含まれる。本事例はそのような癒しの局面を示すものであろう。

以上数件の奇跡体験を中心としたインタビューを紹介した。これらの証言は真耶穌教会が出版する様々な出版物や奇跡体験を証言する見証会という礼拝を通してしばしば見聞きしたものの影響を強く受けているし、また様々な人に対して何度も語り直している過程でより劇的に変容していると考えた方が妥当である。しかし、真耶穌教会ではこの様な言説を時に信者同士の会話の中で、時に見証会に参加して、また出版物に登場する証言等によって繰り返し触れているので、彼らの臨床リアリティに真耶穌教会における癒しの能力は強く刻み込まれているのであろう。

おわりに

以上、真耶穌教会の歴史、教義、礼拝・諸儀礼と癒しの言説を紹介してきた。最後に本教会が台湾において発展した理由を癒しの観点から考える事で結論としたい。一教会がある特定の地域内で成長するという事は多数の生活者の民俗宗教として受け入れられ、かつ、教会側も台湾漢人社会の民俗宗教の特徴を取り込んで定着していったということであろうから、台湾のある部分の民俗宗教が受容される要因を考えるという事になるであろう。

まず台湾の民間信仰の世界において劉枝萬は風土病の土地台湾では疾病による被害が多かったため疫病神王爺が祀られ、寛宥を願い、船流しする送瘟儀礼が盛大になると論じて保健神（王爺や保生大帝、張公（医神）、韋慈蔵、神農大帝等があたる）の重要性を指摘しており³⁷、台湾社会で宗教と医療の関係が密接である事は指摘されている。また佐々木宏幹によれば童乩に代表されるシャーマンの職能者への相談内容の主な物は健康問題であるという³⁸。もちろん生物医学も近代化以降マカイら医師でもあった宣教師や日本統治期の衛生政策で根を下ろしすでに一般的になっている。しかし、生物医学的ヘルス・ケア・システムが全ての病いに対応できるというわけではなく、むしろそれに見離された人々に真耶穌教会が与える影響は甚大で臨床リアリティの重

要な部分を占めているのであろう。実際に他の医療機関や宗教で癒されずにいた人が真耶穌教会で癒されるという実感が広く見られるし、1の男性の妻の様に生物医学の治療を退けるといふ態度はその証左である。

しかし、単に病いが癒されるというだけで真耶穌教会が受け入れられているわけではない。3の男性に見られるように真耶穌教会に通い続ける事で持病が悪化する可能性と向かい合うことすらあるのである。つまりたとえ病いが進行しようとも「道理」を求める心情が働いている事も間違いない。さらに付け加えるならば病いが癒されるという経験自体聖書の記述に見出されるのであって真耶穌教会の教義に矛盾しない。実際真耶穌教会が出版する小冊子『認識真神必得平安』³⁹にも真の神を知ることと心と体と将来の「平安」が与えられるとされている。つまり真耶穌教会では現世利益的であって、聖書主義でもあり、このような側面から生活者の実践の中での教義の受け止め方の論理を読み取ることができよう。ある部分は教義の影響でさらにある部分は癒しの影響が大きな意味合いをもっているのである。この様な真耶穌教会は生活者の宗教としてのキリスト教のよいモデルである。この様な柔軟に台湾で暮らす生活者にあつたキリスト教を造り上げていったということが発展の一要因であつたと考えられる。

本稿では癒しの側面に注目して考察したが、当然全員が何らかの病いが癒されたというわけではないのでこれ以外にも様々な要因が考えられるであろう。真耶穌教会に通う生活者が他の世界観を日常実践の中でどう受容・拒絶・転用しているのかをより緻密に分析すべきであるが、紙幅の関係上本稿で紹介できた事例からはここまでの考察が限界で今後の課題とさせていただきたい。最後に筆者の意図するところは真耶穌教会が道教や仏教など「伝統的」な宗教の神々に対して拝拝することやそれ以外のキリスト教とも同じということではない。もし同じであるならば真耶穌教会に回心する必要はないはずである。むしろ生活者が様々な存在する世界観の間で自らの要求に時に意識的に時に無意識に選りどっている社会的文脈のダイナミズムに注目することでその特異性が見えてくることこそ重要であろう。

注

- 1 台湾ではカトリックを天主教、プロテスタント諸派を基督教と分類している。そこで本稿ではキリスト教と標記した場合にはカトリックとプロテスタント両者を合わせたもの、基督教と標記した場合にはプロテスタントを指す事とする。
- 2 台湾研究所編集『台湾総覧 (2001年版)』通巻第30号、台湾研究所、2001年による。なお、仏教に次ぐものとして一貫道は信者数6,722名、教堂数93箇所、イスラーム教が信者数5,953名、教堂数4箇所、バハイ教が信者数2,330名、教堂数2箇所、天理教が信者数1,591名、教堂数が18箇所である。
- 3 台湾人の寺廟を中心とした民俗宗教は「正式」には民間信仰や道教、仏教と呼ばれているが、一度生活者の視点に立つならばそれらが渾然一体としており、単純に「道教」「民間信仰」等と呼ぶにふさわしくない状況である。一般の人々はこれらを総称して「拝拝」と呼んでいるようであるので、本稿でも人々が拝む対象という意味で「拝拝」と言い表す事としたい。
- 4 潘堅郷「台湾の宣教史よりアジア宣教を展望」日本超教派基督教協会「アジアとキリスト教」出版委員会編『アジアとキリスト教—アジアの福音化をめざして—』日本超教派基督教教会1987年
- 5 加藤実「台湾」日本基督教団出版局編『アジア・キリスト教の歴史』日本基督教団出版局1991年

- 6 鄭仰恩「世紀の転換期における台湾キリスト教の歴史評論」『基督教研究』第61巻第2号1999年
- 7 森山昭郎「日本統治下台湾のキリスト教」『東京女子大学比較文化研究所紀要』第53巻1992年
- 8 山本禮子「植民地末期における台湾キリスト教主義学校の相剋」『アジア文化研究』4号、1997年
- 9 坂本進「台湾山地同胞(旧台湾高砂族)とキリスト教」『宗教研究』第62巻第3輯1988年
- 10 蔡懋棠「台湾の宗教活動」『台湾風物』第29巻第3期1979年、楊越凱「台湾七大宗教源流」『台湾文獻』31巻第1期1980年、高賢治主編、林普易、李添春等著『台湾宗教』台北市、衆文圖書1995年367-370頁等。なお、本稿では研究ノートとしての性質上、資料の呈示に重きを置くために先行研究の検討は代表的なものを紹介するにとどめておく。台湾におけるキリスト教研究史についてはレビュー論文として別稿を用意したい。
- 11 史文森(Allen Swanson)「基督教在台湾」(羅曼華編訳)林治平主編『近代中国與基督教論文集』台北市、宇宙光1981年、查時傑「四十年来的台湾基督教会」林治平主編『基督教与台湾』台北市、宇宙光1996年、賴永祥「台湾教会史—史料研究回顧与展望」林治平主編『台湾基督教史—資料與研究回顧 國際學術研討會論文集』台北市、宇宙光1998年、顔家俊「十字架上的真理 基督教在台湾的發展」李世偉主編『台湾宗教閱覽』台北縣蘆洲市、博揚文化2002年等
- 12 天主教に関わるものとしては瞿海源「台湾地区天主教發展趨勢之研究」『中央研究院民族学研究所集刊』第51期1981年、簡炯仁「天主教導明会與赤山、萬金的平埔族」『台湾文獻』50巻第1期、1999年、古偉瀛「台湾天主教史：史料與研究簡介」張珣、江燦騰編『当代台湾本土宗教研究導論』台北市、南天書局2001年、柯欣雅「為上帝走天涯 天主教在台湾的發展」李世偉主編『台湾宗教閱覽』台北縣蘆洲市、博揚文化2002年等がある。
長老教会に関しては陳梅卿「清末加拿大長老教會的漢族信徒」『台湾風物』第41巻第2期1991年、周怡君「台湾基督教長老教會的社会運動参与(1985-1995)」『台湾風物』第47巻第4期1997年、董芳苑「啓蒙台湾社会現代化的外来宗教—台湾基督長老教會」『台湾文獻』52巻第4期2001年、林秀容「台湾的政教關係研究—以台湾基督長老教會三大宣言為例」『台南文化』新54期2003年等がある。また一教会ではないがペンテコステ派諸教会に関しては董芳苑「台湾基督教靈恩運動之探討」『宗教與文化』台南市、人光出版社1994年、Murray A. Rubinstein 'Holy Spirit Taiwan: Pentecostal and Charismatic Christianity in the Republic of China' edited by Daniel H. Bays "Christianity in China: From the eighteenth century to the present", California, STANFORD UNIVERSITY PRESS, 1996年等がある。
- 13 周宗賢「清末基督教宣教師对台湾医療的貢獻」『台湾文獻』35巻第3期1984年、魏外揚「基督教在台早期的医療宣教」林治平主編『基督教与台湾』台北市、宇宙光1996年、徐麗慧「教会医療在台湾」林治平主編『基督教與台湾』台北市、宇宙光1996年等。
- 14 特にマカイに関するものが多く代表的なものとして王一剛「馬偕的設教和貢獻」『台湾風物』第26巻第1期1976年、陳壬癸「馬偕博士與台湾」『台湾文獻』33巻第2期1982年、陳俊宏「馬偕北台宣教源流軼事考」『台北文獻』第124期1998年等があげられる。
- 15 石萬寿「台南市宗教誌」『台湾文獻』32巻第4期1981年、丁洪学「台南市現有天主教堂概況」『台湾文獻』36巻第2期1985年、周菊香「簡介台南市天主教」『台南文化』新26期1988年、楊森富「五十年来台南基督教」『台南文化』新38期1995年、曾志固「新教传入台湾北部—八十年紀念—」高賢治主編、林普易、李添春等著『台湾宗教』台北市、衆文圖書1995年等。
- 16 史文森「台湾的独立教会」林治平編著『基督教在中国本色化』北京、今日中国出版社1988年。
- 17 代表的なものとして池上良正『悪霊と聖霊の舞台—沖縄の民衆キリスト教に見る救済世界』どうぶつ社1991年、池上良正『民間巫社信仰の研究 宗教学の立場から』未来社1999年等があげられる。
- 18 張芸鴻「太魯閣可樂部落真耶穌教會的传入与發展」『田野詮釈 新生代人類学論文集』(中央研究院民族学研究所、台湾大学人類学系、清華大学人類学研究所研究生田野培訓計畫成果發表會論文集)台北市、2001年
- 19 楊森富「台湾真耶穌教會史略及發展原因分析」『台湾文獻』52巻第4期2001年
- 20 関一敏「民俗」小松和彦・関一敏編『新しい民俗学—野の学問のためのレッスン26』セリカ書房2002年等
- 21 最近の民俗宗教の研究動向、問題点については島村恭則「民俗宗教」小松和彦・関一敏編前掲書が参考になる。

- 22 宮家準『宗教民俗学への招待』丸善ライブラリー1992年22頁
- 23 池上良正「〈宗教学〉「民俗」という視座の可能性へ」『アエラムック民俗学がわかる』朝日新聞社1997年
- 24 日本真耶穌教会本部編『真耶穌教会要論』台中市、日本真耶穌教会本部1943年10頁
- 25 戦後元の名称に戻っている。
- 26 2000年現在。前掲書『台湾総覧2001年版』284-286頁による。
- 27 義工、朱三才主編『2003 台湾基督教会教勢報告』台中市、基督教資料中心、2004年619頁による。ちなみにこの数字は前掲『台湾総覧(2001年版)』と大きく異なっている。おそらく調査法が異なっただけと思われるが、前者は各教会の状況を報告するために、後者は台湾の宗教事情を報告するために用いた。
- 28 具体的には説教を中心とする講道集会、讃美歌の練習をする唱詩祈祷会、奇跡体験の証言をする見証会、信者の家庭で行う家庭訪問、夜に行う晩間集会等様々な形式の集会が行われている。
- 29 日本真耶穌教会本部編、前掲書135頁
- 30 礼拝前に自分の抱えている問題を記入して礼拝中に全員でその問題のために祈るためのカード。葉書大の紙に真耶穌教会助祷カードと書かれ、生年月日、姓名、性別、年齢、主内某教会(どの教会の会員)であるかそれとも慕道者(求道者、つまり未信者)であるか、填表人(記入者)、関係(本人と記入者の関係)、代祷期限が何週間か長期か、住所、電話番号、事由(内容)を記入する。また、注意書きが「1,内容は代祷の原因とその人が今どこにいるのか明記してください。」「2,もし訪問が必要ならば住所と電話番号を書いてください。」「3,子供が代祷を必要とするときは、父母の名前を書いてください」とされている。なお「カード」は国語でカードと発音し、カードの意味である。
- 31 真耶穌教会では牧師を設置せず伝道者、長老、執事が宗教者の役割を担う。そのうち伝道者が専任の役職である。
- 32 台南教会(1927年設立)、南門教会(1968年設立)、開元教会(1976年設立)、東昇教会(1981年設立)のこと。
- 33 医療人類学者アーサー・クラインマンは「ヘルス・ケア・システムは社会的・文化的に作られたものであり、様々なかたちをとった社会的リアリティに他ならない。」「個人を超えて存在する、人びとのあいだの相互作用の世界。」「相互作用の世界、そこで、日常生活が営まれ、社会的役割が定義遂行される。(Arthur Kleinman "Patients and Healers in the Context of Culture: An Exploration of the Borderland between Anthropology, Medicine, and Psychiatry.", Berkeley, University of California Press, 1980, 大橋英寿、遠山宜哉、作道信介、川村邦光訳『臨床人類学』弘文堂1992年38-39頁)」と社会的リアリティを定義した上で、臨床リアリティを「社会的リアリティの健康に関わる側面、とくに病気についての態度や規範、臨床の場面での人間関係、治療活動」、「臨床現象は社会的に形成されるとともに、社会的世界が臨床に向けて組み立てられる。(同上書41頁)」と定義している。
- 34 渡邊欣雄『漢民族の宗教 社会人類学的研究』第一書房1991年26頁等
- 35 池上良正「現世利益と世界宗教」池上良正、小田淑子、島蘭進、末木文美士、関一敏、鶴岡賀雄編集『岩波講座 宗教 第2巻宗教への視座』岩波書店2004年
- 36 藤野陽平「台湾キリスト教における健康観に関する一考察 —真耶穌教会を事例として—」(慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻修士論文)2003年、「台湾の地方祭祀にみる民俗的健康観 —小琉球における王爺の迎王祭典の事例から—」『人間と社会の探求 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』58号2004年。ちなみに聖書における「平安」はヘブライ語の「シャローム」、ギリシャ語の「エイレーネー」の訳語であり、日本語の「平和」、英語の「ピース」に該当する。
- 37 劉枝萬『台湾の道教と民間信仰』風響社1994年134頁
- 38 佐々木宏幹「問神の儀礼過程と依頼内容 —台湾・台南市の一童乩の場合—」吉田禎吾、宮家準編著『コスモスと社会—宗教人類学の諸相』慶応通信1988年
- 39 『認識真神必得平安』(福音小冊9号)真耶穌教会台湾総会発行、台中市

(付記) 本稿は2003年1月に慶應義塾大学大学院社会学研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。